



POINT 1
知・技

語句の意味を問う漢字テストの継続的な実施

漢字の学習は、決して真新しいものではないだろう。しかし、ICTが発達した昨今、自分の手で文字を書く機会は、学校教育でも家庭教育でも失われつつあると感じている。

そこで、本項では「語彙力を高める漢字学習」について提案したい。以下にテストの例を示した。このような10問テストを毎週末の授業で行い、漢字の学習を定着させるとともに、子どもの語彙を増やせるよう取り組んだ。

1 意味から迫る漢字練習

(5) (4) (3) (2) (1)	(5) (4) (3) (2) (1)	(1) (2) (3) (4) (5)	(1) (2) (3) (4) (5)	(1) (2) (3) (4) (5)
ちゅうしんのだとえ (しんぞう)	さしずること (しき)	実物をまねて作ったもの (もけい)	本質が他におよぶこと (ほんえい)	かわをあらうこと (せんがん)
(5) (4) (3) (2) (1)	(5) (4) (3) (2) (1)	(5) (4) (3) (2) (1)	(5) (4) (3) (2) (1)	(5) (4) (3) (2) (1)
—	—	—	—	—

【漢字テストの問題例】

特に留意した点は大きく3点ある。1点目に、継続的に家庭学習を促すことである。原則週に1回のペースでテストを実施することで、家庭学習の習慣づくりをねらいとした。2点目に、語句の意味から漢字を書き取る問題を設定したことである。家庭学習の中で、漢字そのものだけでなく、意味も合わせて知る機会を増やすことをねらいとした。3点目に、授業時間中に少

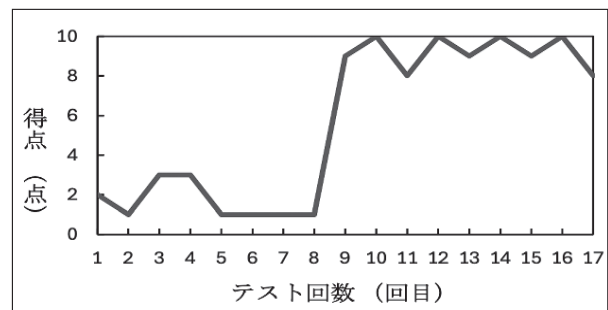
しだけテスト勉強の時間を設定した。教師が机間指導の際に勉強方法について助言したり、学校で途中まで学習することでツァイガルニク効果(※1)を狙ったりすることを目的とした。

※1 達成した事柄よりも、達成できなかった、あるいは中断させられた事柄の方がよく記憶に残る心理現象のこと。

2 習慣化で子どもが自信をもつ

1年間取り組んだ結果、家庭学習の習慣付けと子どもの語彙を増やすことには一定の効果があったと感じる。一方で、漢字を暗記することまでで学習を終えてしまう子どもも少なくない。活用語彙を増やす言語活動を取り入れることで、一層の効果が期待できると感じた。

漢字テストにおいて、ある子どもは漢字テストで初めの内は2点程度の得点だったが、学習を進める中で子ども自ら奮起し、後期のテストでは平均9点ほどの得点を維持することができた。本学習の副次的な効果として、国語を苦手とする子どもでも勉強を習慣付けることで得点を伸ばし、学習への自信を付けることができたと考えられる。



【上記の子どもの点数の推移】

生かした授業づくり

広尾町立広尾中学校 教諭 遠藤 拓哉



小学校3学年

小学校5学年

中学校1学年

POINT 2

思・判・表

探究活動とプレゼンテーションを軸にした本文読解

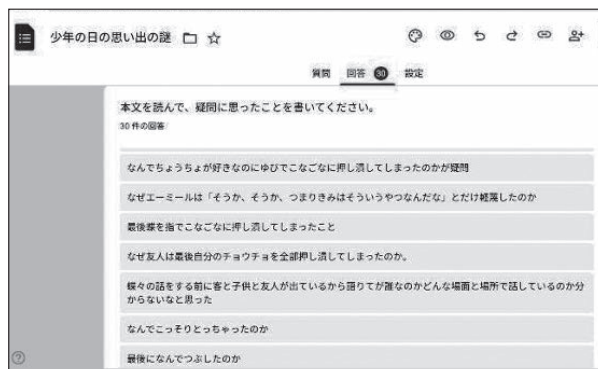
語義を覚えることも大切だが、覚えた言葉を適切に使いこなすことも更に重要であろう。そのために、いわゆるチョーク&トークの授業から脱却する必要があると考えた。

本文読解に関する実践の大まかな流れを以下に紹介する。

- ① 本文を読みながら、子どもの疑問や気付いたことを収集する。
- ② 収集した疑問や気付いたことを分類する。
- ③ 疑問を解決するための調べ学習を行う。
- ④ 疑問の答えを理由とともに発表する。
- ⑤ 発表を聞き、疑問の答えをノート等にまとめる。
- ⑥ 必要に応じて、教師から補足説明を行う。
- ⑦ 学習全体を振り返る。

この実践で特に留意したことが3点ある。

1点目に、1人1台端末を効果的に活用することである。この実践では、疑問の収集と分類、子どもの発表の2つの場面で1人1台端末を活用した。



【疑問の収集で子どもと共有した画面】

疑問の収集では Google Forms を活用し、収集結果をすぐに子どもと共有した。また、データで収集することで内容ごとに分類する際に AI を活用することができ、教師の負担を減らすこともできる。また、子どもの発表では、Power Point を活用して、分かりやすい発表につながるようにした。

2点目に、お互いに分かりやすい発表を心掛けることである。調べ学習で新たな語句に触れた際は、併せて意味を調べ、発表の中で紹介するよう声掛けを行った。そうすることで、子どもの活用語彙が拡張すると考えている。

3点目に、発表後のフィードバックを行うことである。それぞれの発表について子どもに感想をまとめさせて、発表者及び発表グループにフィードバックを行った。

以上の実践によって、子どもの発表や振り返りの中には非常に鋭い視点から作品に着目できるものも表れ、子どもたち自身の疑問から目指す資質・能力を身に付けられる授業も増えてきたと感じる。

したがって、学習の道筋を子どもに委ねることは、活用語彙の拡張を図るだけではなく、いわゆる「主体的・対話的な学び」の実現に寄与できる学習活動であると感じている。活動内容の充実を図り、学びの質を高めていきたい。

また、この活動を楽しむことができた子どもが多く、2学年の教材でも実践を重ねていきたい。